

レクチャー&コンサート「距離との対話」

プロデューサー 伴 谷 晃 二一

二〇〇六年七月三十日(日)、広島芸術学会主催「広島芸術学会創立二十周年記念レクチャー&コンサート「距離との対話」」(エリザベト音楽大学ザビエルホール・全百八十席の中約百二十席、開演・十八時三十分)が開催された。この企画は、美術の側から企画された「広島芸術学会創立二十周年記念芸術展示(制作と思考)」ともタイアップするものであり、当日は日程的に美術展示とも同時展開となった。

この(レクチャー&コンサート)は、「広島芸術学会創立二十周年記念芸術展示(制作と思考)」の実施に併せて、音楽においても、演奏者の側から作品と聴衆との「距離」や二十世紀初頭から現在までの歴史的な「距離」等を、ピアノの(レクチャー&コンサート)を通して模索する、ことを趣旨として掲げ展開した。

全体の運営は、プロデューサーの他、アシスタント・プロデューサー(坪北紗綾香・エリザベト音楽大学・音楽教育/作曲)、ディ

レクター/司会(馬場有里子・エリザベト音楽大学・音楽学)が中心となり進められた。企画内容は、司会と四人のピアニスト(魚住恵・エリザベト音楽大学、田中香月・エリザベト音楽大学、伴谷真知子・広島文化短期大学、平本恵子・エリザベト音楽大学)により、プログラムに沿って各レクチャーと作品の演奏が行われた。

まず最初に、広島芸術学会の代表者である金田晋会長より、広島芸術学会が創立二十周年を迎えるに際し、これまでの経緯や一連の記念行事のうち、*「芸術展示(制作と思考)」*および(レクチャー&コンサート)の同時展開の意義等について挨拶があった。その後司会者より、二十世紀を中心とした作品のプログラミングの意図、そして演奏者のプロフィールを紹介した後、司会者から各演奏者へのインタービューが行われた。その際、取り上げる作品をもとに、作品の歴史的位置付けや距離、演奏解釈、作品と演奏者および聴衆との距離等のレクチャーを、演奏者自らが行った。

まず、プログラム（演奏順）は以下のとおりである。

1. 伴谷真知子

サティ

《グノツシエンス第2番》1890

《でぶつちよ木製人形のスケッチとからかい》1913

ドビュッシー

『前奏曲集第2巻』1910-1913より《花火》

2. 田中香月

ロースラベッツ

《ピアノ・ソナタ第2番》1916

3. 平本恵子

松平頼則

『幼年時代の思い出』1928-1930より《金魚》、《オルゴール》

ドビュッシー

『前奏曲集第1巻』1909-1910より《帆》、《西風の見たもの》

4. 魚住 恵

武満 徹

《雨の樹素描》1982、《雨の樹素描Ⅱ》1992

5. 伴谷真知子

伴谷晃二

《風の環礁、ピアノのために》1993

今回取り上げられた作品はいずれも、ベル・エポックの時代から二十世紀末までを対象にしたものである。サティ、ドビュッシーといった近代の作曲家の作品から、その影響を受けた松平、武満、さらに第二次世界大戦後の武満の影響下で育った伴谷作品、一方二十世紀初頭から第一次世界大戦を中心にした、ロシアの特殊な状況下でのロースラヴェッツの作品等を紹介し、歴史的な位置づけや作品の様式的・構造的な分析、および演奏解釈等を行った。その際、歴史的な経緯を縦軸とする「距離」、一方演奏者は、作品の様式的・構造的な分析を通して演奏解釈を行い、作品を媒体とした演奏者と作曲者との「距離」および作品を通して演奏者と聴衆との「距離」を重ね合わせ、横軸としての時空間に構築された作品を確認する。歴史的な縦軸と横軸の時空間に構築された作品との接点を辿る時、作品を享受する演奏者と聴衆とが今日につながる歴史的な時空間の中で、各作品の歴史的・社会的・芸術的な位置づけを暗黙の中に了解し、各作品がもつ「伝統と刷新」の意味を共有して行けるのではと思われる。

「広島芸術学会創立二十周年記念（レクチャー&コンサート）「距離との対話」」は、「広島芸術学会創立二十周年記念芸術展示（制作と思考）」とのタイアップの中で、音楽と美術部門とが共に被爆後のヒロシマを縦軸の視座に置きながら、レクチャー&コンサート「距離との対話」を通して、現代芸術のもつ「距離」の意味と

社会的役割の大きさ等を模索することができたのではと思われる。

二十周年記念行事を終えて、芸術諸ジャンルの統合された場である「広島芸術学会」が担う社会的役割の大きさと、美術・音楽他の芸術諸ジャンルにむけて主導する「広島芸術学会」の今後の発展が一層期待される。

(ともに・こうじ エリザベト音楽大学・大学院音楽研究科・作曲)